日本生物學會誌

第 7 号

10.1.15

日本生物學會

1979年12月20日

第　7　号

もくじ

レオパルト・2：人間の魔性（1）…… 213

亜無比有馬：カエルのぼやき …… 216

足立興一：総会、そのほか …… 219

書評その1：「われら生涯ヒラ教員」西沢紀生編著 …… 224

書評その2：「原　発　死」松本直治著 …… 234

編集者への手紙 …… 238

編集局だより …… 239

広　告　欄 …… 243

人間の魔性　(1)

レオパルト　2

またしても、腹が立って、頭にきて、書きたくなったので、書くことにしました。あの教授のやつ、いかにも自分は自由主義者であるかのように、民主的なポーズを示しておきながら、実験には自分の独断で（人の意志をまったく無視して）、人を利用する。これから、それがどういうことかを書くことにします。

ある日、教授はわれわれ助手に「看護学校で講義をやってもらいたいのだが、それは君たちの自由でよろしい。君たちが講義をやりたくないのなら、それをことわります」と言う。そして、我々助手に、講義するかどうかを、一人一人に聞いた。そのとき私は、教授の言葉を、まじめにそのまま受けとった。それで私は「私には講義などできそうにもありません」と答えたと思うのです。確実なことは「私は講義をします」と答えてはいないのです。それがどういうわけか、私の知らないうちに、講義をやることに決定されていたのである。私は不思議に思って、そのことを、教授に聞いたところ、教授は「君、講義をしますと答えたではないか」と言うのです。次の日になって、私が講義をしますと言っていないのに、どうしてそうなったのか、また私は、「たしか“できそうにもありません”と答えたはずですが」と教授に質問したところ、教授は「どちらでもすればいい。できそうになかったら、できるようにしたらどうかね」とぬかした。ただし、教授はすでに看護学校へ講義をすると答えていたのである。教授は明らかに講義を私に強制している。私が講義をします、と言ったというのは、教授の単純な聞きちがいではないと思う。始めから教授は私に看護学校の講義をやらせたかったのだ。あとで教授が言うには、「助手は一つも講義をやっていないので、せめて看護学校の講義ぐらいやってもらいたかった」、「以前、看護学校の講義は、助手全員でやっていたから、二人で講義はできない」と。これらのことから考えると、教授はすでに、ずっと以前から、自分のやり方を決定していたのだ。徹底的に腹が立つのは、教授が自分だけで決定したやりかたを、いかにも民主的で自由があるがのようにして、人におしつけることだ。教授が言う自由は教授だけの自由であって、我々の自由ではないのだ。上部構造にいる人間はまったく信用できないことが、またしても証明された。

教授は始めから、他人を自分の都合のよいように利用し、道具として使うことを当然であると考えているからこそ、いくら民主的に振舞っても、他人を強制させることになる。私が、教授が聞きちがえたのではない、と言ったのは、始めから講義をやらせたかったという教授の意識が先走りして、

講義をやりたくないという私の意志を無視してしまったことだ。

よく教授は「手伝ってもらって、どうもすみません」というが、私にはそんなもの、しらじらしいうそにしか聞こえない。どこの教授も同じであるが、「大学も社会なのだから、君のようなやりかたをすると、社会のよき秩序が破壊され、君自身も社会に適応できなくなるだろう」というが、教授たちの秩序というのは、自分たちのための秩序であり、他人を教授たちの利益のために、道具として利用するのを正当化する秩序なのだ。「大学の秩序を破壊しないで、みんななかよくやってくれ」と教授はいうが、自分はきたないことを平気でやってるくせに、よくそんなことが言えたものだ。教授のきたないうそがそのまま通用する大学という社会のなかで、秩序（教授のいう秩序）を守り、みんな楽しく、なかよく、なんてこと、バカバカしくてやってられるか。

あの教室でおかしいのは教授だけではなく、助手たちも同様におかしい。教授はもう大学をやめて別の大学へ行ってしまったので、私も含めて、今は好きかってなことをやっています。私は何をやっているかというと、自分にとってほんとうにおもしろいこととは、いったい何か、という問題について考えているのです。この問題は、以前からずっと考えつづけてきました。でもむずかしい問題で、いまだに解くことができません。

けれど、今度は、問題の出発点をまず選んでみた。だれからも束縛されないで、いつ、どこでも、自分の好きかってにやれるものであること、私は貧乏だから金のかからない、紙と鉛筆だけでやれるものであること。このあいまいな条件を出発点にして、おもしろそうなものを探してみました。

その結果は、おかしなことになった。それは、いろいろ考えたり、やってみたりして、おもしろいものを探しているうちに、なんにもやる気がおこらなくなってきたのである。なぜそうなるのかといえば、多分、なにかおもしろいものを探してやろうとするけれども、そんなものどこにもないように思えてくるからであろうと思う。実験なんかおもしろくもないし、実験に必要な道具づくりなど1～2時間であきてしまう。ゼミナールで発表する論文を読んで時間をつぶすが、それももちろんおもしろいものではない。少しはおもしろいと思っていた科学思想史の本など読んでみても、それ以上に、それ以外に、おもしろくならない。これも、あまり集中できないので、すぐやめてしまう結果となった。

このようなことがくりかえされたあと、どうしてほんとうにおもしろいものがないのだろうか、どうして自分はおもしろいことをやりたがるのであろうか、などと考える。それを考えてもどうなるものではないが、もしかして、何もないことがおもしろいことなのかもしれないと思ってみる。しかし、そうでもなさそうだ。何もないというのは、たしかに気楽であるが、不安でもある。そんなところに長くとどまっていたくはない。それは、耐えられないものである。徹底的におもしろいものを見つけてやろうとすると、なかなか見つからないので、いらいらして、つかみどころのない不安におちいる。それに、そうなると、どういうわけかねむたくなってくる。ほんとうに、おもしろいものを

みつけようと思っているのであって、すこしくらいおもしろいものなど、どうでもよいのだ。今日、おもしろいと思っていたことが、次の日にはそれほどでもないように思えることもある。そして別のものを探すが、そんな時次の日になってみると、またおもしろくなくなるのではないかと心配になる。恐しいのは、何もない、しずみこんだ状態だ。こうなると、すべてのことにたいして、否定的になってしまう。そして、なんにもやる気がなくなってしまうのである。

その状態から脱出するための力を与えてくれるのは、勇気だけである。何もないという苦しい状態からぬけ出るためには、やろうとする意志、すなわち絶望的になった自分を忘れさせてしまいそうな意志、が必要だ。そしてまた、いくらかやけっぱちになって何か探してやろうとする気持も必要のようだ。ふてくされて、このように考えていると、いろいろ思いつくものだ。

それで、自分がほしいと思っている本の名前（たとえば、「星界の報告」「ギリシア人の科学」「失われた時を求めて」など）を書いて、壁にはりつけておくことにした。それらの本は、それほどほしいとは思っていないのだけれど、それを書くことによって、しだいにやる気が出てくるように思うのである。次には、ヒュー・トマスの“スペイン市民戦争におけるアナーキズム”について調べてみよう、などといろいろやることが出てくる。しかし、いつやる気がなくなるかわからない。

以上のことは、絶対的なものを探していることになるのだが、絶対的なものなどないことがわかっていながら、探している。その行為は、ときどき、まったくやる気のない自分をつくり出してしまい、そのような自分はおかしなもの（無気力）を持ってしまった自分なのだ。おもしろいことをやろうとするだけでも、むずかしいものだ。

結局、人間の集団のなかで、悪いものを身につけてしまうのに加えて、一人で好きかってなことをやるときでも、おかしなものを身につけてしまう。

カエルのぼやき

(亜無比有馬)

実験動物としてカエルを使うようになった。材料を換えると、その都度、その動物についての知識をつけねばならぬ。以前使った材料の知識、コシコシ集めて留ったデータなど、有って無に等しい。生物学には、物理・化学のように、すべての種に共通するような法則はないのである。最近、物理・化学出身者が主体ではあるが、分子生物学なる分野でその法則を作りつつある。ネコもシャクシも、ホ乳類などの遺伝情報を細菌に読み取らせようとしているし、遺伝子組み換えなどのオゾロシゲな試みがなされつつある。しかし、現在のところ、分子生物学は他の生物学の分野に対しては無力である。一つの細胞から多細胞へ、さらに器管が分化し、個体として確立し、ある時期色気づいて、つれ合いを求め子孫をつくる。その様式は種ごとに異なり、すべての種を識別したとしても法則性を見い出すのは遠い将来のことであろう。あるいは、推定学問にほかならない進化学がある。これは、タイムマシンでも発見されない限り信用できかねる。それ由、生物学はおもしろいし、私たち浅薄の頭脳の持ち主でも、一年くらい、ごく狭い範囲の知識を身につけ、社会へおちこぼれることもなく、大学院へでも進学すれば、すぐ専門学?になってしまう。実際のところ、他人の扱っていない材料を一番初めに、実験化したり、新しいテクニックを交猾に用いれば、その道の大家である。遅れて追試しても遅れた分だけ評価は落ちる。生物学では一番が大切であるらしい。

こういった、記載、あるいは、推定学問である生物学に対して、他の分野の人々は、好ましい評価は与えようとしない。ある物理の教官いわく「分類学などは、切手集めと同じですね。」生物の分類学でない教官「そのとおりです。」しかし、実際は、生物学のなかで分類学こそは、全宇宙の生物を一定の規定のなかにリスト化するという最も法則性をおびた学問なのである。医学部教官のたまわく「生物出身の人は使いものにならない。助手は医学部出身者でなくてはならぬ。」医学部において生物出身者はバカだと言わんばかりである。ところが現実は、医学部の学生さんは、金のもうかる臨床の方へ行ってしまい、基礎にはほとんど来ない。また来たとしても博士号を得れば「はい、さよなら」である。残ったのはヘンクツの偏り者だから、下につく者は迷惑する。

ごれ等の生物学者に対する、必ずしも見当ちがいとはいえない、評価は、生物学イコール博物学という概念があるからである。薄ぐらい実験室の片過で一生懸命カエルの金玉を切りさいていたり、

葉っぱを詳細に、それらしくスケッチしている、その姿である。実際、そういった傾向にある。また、そういう評価をされたとしても、私自身何の反発もないし、いや気も起こらない。長年の慣れもあろうが、私自身、自分を見て実際そうであると思っているからである。人類のために貢献する、社会のために……、そんなことは一度も思ったことはないし、そのような方向に研究を進めようと思ったこともなく、陰湿な、自己満足的な実験活動を行なっているからである。特に、実験材料として両生類を用いる人々は、そういった傾向にあるのではないだろうか。昔は、シュペーマン、マンゴルドなどすばらしい栄光を背にした「実験者」もいたのだが、彼らは一番初めに遂行したことで、幸運を得たに過ぎない（故人に対して暴言多謝）。事実、彼らも当時陰湿な実験活動をしている。ヨーロッパ各地が戦火で燃え、人々が生活不安におびえている最中に、彼らは、実験に没頭していた（スパラシイ、見習うべきだ）。ゴミ箱からガラス片をあさり、その中で、裏の小川から拾ってきたイモリの卵を手術し、頭を二つ生やしたり、種々の奇型　を作成した。彼らにしてみれば、自己の興味と、趣味へのあくなき追求にほかならない。この陰湿な研究が一度脚光を浴びると、もはや陰湿ではなくなり、一躍世界へ躍り出る。今の分子生物学の突然の台頭と似ていないこともない。一躍世界中の研究者が注目し、きそってやりはじめるのだが、遅れた者はもはやノーベル賞の対象ではなくなる。かの有名なモーガンは、かつて発生学者であり、名著も残しているが、そのことを知っている学生さんは現在少ない。

現在、両生類を実験材料として使っている人は、その理由として、おそらく、好きであろうからであり、研究者の性質が陰湿だからである。もし、そうでなかったら、脚光を浴びている分子生物学や自然保護を一応たてまえとしている生態学をやるであろうし、医学への応用性の可能性の高いラットやマウスを選ぶであろう。何にも、好きこのんで両生類を研究する意義は、一部の特殊なテーマを除いては、必要ないのである。

深夜、給料取りは早々と家路につき、無職者か、未婚者しか居残っていない建物の一室で、そんなことを考えながらカエルを裂いている。読者諸君は聞いたことがあるだろうか？ゼノパスの鳴き声を、哲人のつぶやきを。グークーと低い声で鳴いている。実験動物として選ばれたもののなげきであろうが？　泣き声とは思えない。偉大な哲人が宇宙の真理を説くに似たる。私にはこう思えてならない。私のこういう印象に対して、某教官は笑いながらちゃかした。「血中の甲状腺ホルモン量を測定しますと、変態後期急激にその量は増加するが、変態後減少し、カエルにおいては、ほとんど分泌されていないんですよ。人間では、胎児の甲状腺ホルモンは、出産後も分泌されつづけていて、もし分泌が停止すれば、種々の障害を引き起こします。その障害の一つにバカがあります。つまりカエルはバカです。何も考えてはいないんですよ。」

アンヒューマ　（ポーター著「ハーペトロジー」より、亜無比有馬　転写）

現存種は1属1種、アンヒウマと書いている人もいる。化石は、ヨーロッパ始新世と北アメリカの中新世とから記載されているが、前者は疑問。

半幼形、役に立たない四肢がある。成体は鰓を失うが、一対の鰓孔がある。動物中最大の赤血球をもち、体内受精をする。北アメリカ東南部に限って分布。

この記載、まさしく我に似たる。30にして結婚せず、ロクな研究もせず、役立たずとののしられ、プライドももはや失い、心の中に青白き炎を燃やしつつ、陰湿なる実験室にて給料取りがいなくなったころをみはからって活動する。

ここに　ペンネーム　亜無比有馬　誕生す。

総　会、そのほか

足立興一

わたしは本〆会の会長を尊崇しておりますので、いつかはメッカないしはお伊勢さんの如く（赤の広場でもよいです）お参りしようと心にきめていましたところ、社用で金沢へゆくがお前も行かないか、という奇特なおさそいを受け（大いに徳として名をあげておきます。サンコンタクトレンズ、丸山、長谷川両氏）１０月５日午令相応以上にイタんだ体を車で運んでもらうハメとはなりました。金沢第１ホテルのロビーで PM ５：３０におちあい、未だ総会が開かれたことがない、というところから、どちらからともなく（会長注：ウソツケ）、これを第１回総会にしようということになりました。はじめ２人、のち臨時会員２名を加え、人数はいささか少いのですが、そこはそれ、会長の独裁という会則と、しゃべりたい人がしゃべり、き　い人がきくという総会規約にしたがい、１１ PM におよびました。どちらがよくしゃべったかは御想像にまかすとして、話題は、マジメな生物の話から、応用人間生態学としての落語におよび、何ひとつきまるでもなく盛況裏におわりました。これだけの印象記ではあいそがないので、会長の新著、「人と生き物　４８講」にふれます。月刊センター時代から愛読しておりましたが、内容は同じでもちょっと硬くなった感じです。これはだいぶいきぐるしくなった今の時代のよみてがわの変化の反映でありましょうが、月刊センターにはねだんのついていないゆえもあるかと思います。（これ書評にならん。）

気のつきましたことにかこつけて、おしゃべりをちょっと。

３４ P あたり、上にはり出した眼。何か忘れましたが、だいぶ以前に見ました物の本によりますと（これをおぼえているようだと、もっとえらくなれるのですが）、これに２種あって、松果体（後）と頭頂器（前）にそれぞれ相同のが、松果眼と頭頂眼とよばれてます。両方ともが眼になることはなく、奇眼というのだそうです。円口類やカエルでは松果眼で、視細胞からレンズまであるニュージーランドのムカシトカゲのは頭頂眼です。手近かなカナヘビの頭のてっぺんのうろこの小さなへこみも、おそらく頭頂眼の方のなごりなのでしょう。もっと、けったいなことに、ともに正中線上にあるくせに、松果眼の柄はちょっと右にふり、頭頂眼のは左によるのだそうで、これも、もとは有対眼であったらしい証こだそうです。わたしにとっては５すじくらいすじちがいの恩師（おまえみたいなヒネた

弟子もったおぼえない、といわれそう）徳田御稔先生に言上したところ、そんなことはない、といわれたのですが、どうもそうした方が、すじが面白いのです。（だいいち、ここは神経板のつぎ目ですから有対の方が自然です。）人間では松果眼らしいのですが、残念にも3つ目のようにひたいの真中ではなく、間脳の後上端に近く、小脳と大脳半球のすき間、むしろ後頭の帽子のすべり止め隆起の奥あたりに相当します。右が残るわけですが、あまり政治とはかかわりはないようです。これで物が見えるようなら試験のときは帽子をかぶるよう、といったことになるのですが、ムカシトカゲの眼ですら、よく見えてるとの話はききません。

わたしは加藤 勝 先生（「光と動物の生活」など）の影響もうけておりますので、これは、わたしたち（もっと、この眼をつかっている仲間）では、生活の臓性の部分をうけもっているのだと信じております。明暗そのものを感じ、日周、長日・短日などのことです。ただし、ヒトの成人では骨も厚く、奥深いので光はあまりとどきそうもなく、明るいときはサワヤカで、暗いときは気がメイルなども、ふつうの偶眼をとおして、その奥の視床下部を介してるようです。赤ん坊もそうか、どうか気にした記事をみかけません。（体の中は案外明るいと思います。胃鏡の電燈をつけますと、外からわかるそうですから、逆も真のはずです。胎児環境も真くらやみではないのです。）

かつて、キャンデイーズは「もうすぐ春ですねえ、恋をしてみませんか」とうたいました。蛇足ながら、もうすぐ春というのは、まだ春ではないということです。まだ気温も上らぬときに春のけはいを感じる、たとえばニホンアカガエルは、まだ雪の残った水田に卵をうみます。見に行って、やはり本には本当のこともかいてあるなあと感けきしました。何をもってか、やがてあたたかな ― 食物のゆたかな ― だから子供をふやしてもよい春がくるのを知るかといえば、外的要因としては短日にすぐ気がつきます。（ただし、実験的研究の有無は知りません。教師カ業も数十年しますと、専門と非専門の間をズル賢こくにけまわるすべをおぼえます。いけませんなあ。）その光を感ずるのが、この眼だと思うのです。恋もしよう、子供もふやそう、と可レンなキャンデイーズたちは生物界の大原則をうたい上げます。もっとも、あのうたには、も少しおそいツクシが顔を出すところもありますが、とりあえず不問にしてください。ツクシつみに行って、つぎの日、かぜをひいたなどの体験をおもちでしたら、ありがたいです。

さて、光を感ずるだけなら眼は2つはいりません。いらんものは消える、の進化の大原則がここにもあらわれまして、どちらかを残すという、考えてみれば、いわば、はなれわざをやってのけます。それに反して腹側眼（こんな言葉はありません。口、消化管のある方に向いてますので、仮に、こうよんどきます。）は、右に行こうか、左にしよか、エサはどっちに多いやろ、（敵のことも、仲間のこともある）といった体制の行動のもととなります。体の両側の視覚（光覚、一般には感覚）は眼もないミミズ（皮ふ光覚）の昔から、こういうことになっています。せきつい動物でも神経板の時代にすでに有対の眼になるところがあるそうです。片側に光を入れてやれば、というような仕事はないか

なあ。なあに、ネウロンなんてないときにでもよろしい。

わたしたちの脳が奇数なのは、ウズムシの神経幹よりは左右のつながりを大切にしたんだろうと思ってます。

かくて、解散したキャンデイズまで御登場ねがったのですが、体性の眼は偶に、臓性の眼は奇にという、もっともらしい、あたりまえの、かいてしまえばつまらんことになりました。

やれ安心とさらによみすすみますと、またまたキャンデイズをわづらわすことになりました。ちょっと変った心理学の友人がおりまして、後藤金十郎氏（立命大・教授）といいます。かれとの最初のであいがタテジマとヨコジマの話をきいたことでありました。以下うけうりをひとつ。心理学の教えるところによれば分割する方が大きくみえるのだそうです。ウソと思ったら真四角をかいてシマを

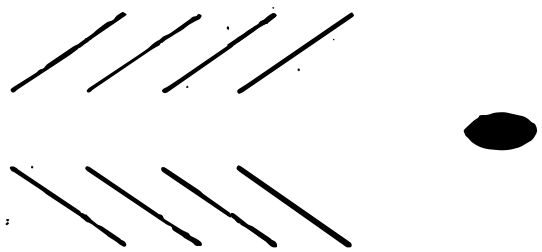
F1

ひいてみてください。（図1）四角ですから、どちらがタテでもヨコでもよい。あーらふしぎや、シマに直角な方が長く見えましょうが。ですから、３８ページの記さいは少しおかしく、キャンデイズでも（この項、足立追加）カリのミキは（勉強がいそがしくて、そんなことしらん、または１年以上も前のことは忘れたという人のために、いつも左、あいつはしくじった、という時だけまんなかになったのがミキです）はタテジマ（人間の体の長軸に平行な方 ― 会長が妙なことかくからややこしうてかなん）を着た方が太くみえ、ちょっとふくらんだスウ（向って右、解散宣言やってから、ひときわふくらんだ。タレントは食餌制限なる非動物的とりあつかいをうけてたよう。まん中のランはフアンではないのでどうでもよろしい）はヨコジマを着た方が背たけが伸びてみえるはずなのであります。ところか実際は会長が誤解し、万人が誤解しているとおりでありまして ― 会長もまた、ただの人であると安心 ― タテジマは細くみせ、ヨコジマは太くみせるのであります。後藤氏によれば、細く、太くというから誤解がおこるのであり、スラリとみえる、ズングリみえるというべきなのだそうです。

では、このスラリとは何か、を多少なりとも生理学に興味をもつ人間としては一応ふれねばなりません。ＨＵＢＥＬ，ＷＩＥＳＥＬ（注：脳生理のえらい人、アメリカ在住）また、その流れをくむ一派（先天的に、分化したいろんなネウロンをほしがっている、今もって前成説みたいな人たち）な

ら、脳の中にスラリ細胞 ― スラリと感ずるときは、そのネウロンが興奮する ― 何分に、線分の方向細胞を発見、遠細胞、近細胞から、おばあさんの顔の認識のためのおばあさん細胞までほしいのですから ― といった細胞をみつけたいでしょうが、私は多少、首をひねります。それよりか、スラリ感は髪のすき具合や水の流れの体験から抽象された（ルリヤの言葉なら史的に）ものとした方がよいと思います。自分の仕事なので恐縮ですが、図２のような１対の図をかいて、一方のサカナのような

F2



ものを、ギザギザの方に通そうとすると（具体的には右目と左目でそれぞれが見えるような装置をつかいます。ことに、少しヒネた斜視患者さんだとことが明白になります。）サカ目か、順目（サカ目はひっかかるので言葉がありますが、すなおに通る方は言葉がないので仮に作った語です）で、全くちがった反応をやります。一応もんどり効果と名をつけたのですが、もんどり、うけ、どう、笠など、えり、定置網のはじっこ、なんでもよろしい ― に対するサカナの行動によく似てます。おそらく、サカナがどないするか見たことなくても（見なくても見当はつくのですから認識の機構は大したものです）髪をくしけずったり、なでられたり、かんながけをしたり、カツオブシをかいたりしたときの体験が神経系の構造の中に定着するんだと思ってます。錯視の有無の体験依存のことと、錯視が視覚過程を円滑にするための神経構造に由来するといったことからの類推です。ですから、脳の中にスラリ細胞といった変な単一細胞はなくてもスラリ感のいうものが、網膜や脳の生理的な構造（形態と機能のさかい目ですからこのようなあいまいな言葉をつかうのですが）にもとづくのだろう、と思っています。子供の絵の中にスラリ、ズングリの表現はないでしょう。

とはいっても、動物界の中のタテジマ、ヨコジマが何をいみするかはわかりません。イシダイがカゴカキダイをうらやましがった話もききません。いや、まてよ、ニセクロスジギンポの先祖は、ホンソメワケベラをうらやま　がってたかな。

後　記 ： もっともスラリには多少、価値がくっついており、女男を問わず、スラリがみ力的なようです。（見るところによれば、資本主義国だけにさくアダ花とはいいきれぬよう。ズングリもタブチ

くんの如くマン画の材料としての価値があります。ときに、チャップリン映画に見るごとく、なぜ囚人服はヨコジマなのでしょうね。負の価値も座標をかえれば正に転化するか。北杜夫の現物はどうだったかな。話と頭が錯乱してきたので、もう止めます。）

ヒトも先祖がサカナであった時代の水抵抗の少なさのなごりなのか。槌田敦先生風（「石油と原子力に未来はあるか」）にいえば、エントロピーを増加さすことの少い故か。もっともスラリがすぎて、ヒョロリとなると、構造力学的価値が顔を出すので注意（なやめる女性あり）やはり洋服屋さんは思案しますな。

書　評（その1）

「われら生涯ヒラ教員 —— 子供をダメにするものとたたかう」

西沢紀生 編著

太郎次郎社刊　0036－0337－4456

1300円　1979年3月15日

この夏のことである。金沢大学理学部を卒業して、ある中学校の教員をやってる卒業生が、ふらりと私のところを訪ねてきた。そして、1冊の本を私に渡し、「おもろい本ですよ。先生喜ぶのやないかと思って持ってきた。差し上げます」と言う。見ると、表紙に大きく、「われら生涯ヒラ教員」と書いてある。生涯ヒラ助教授で終りそうな私は、「コラ、お前、これは皮肉のつもりか！」　彼はニヤニヤするばかりで、否定も肯定もしなかった。

さて、この本は、私の「生態学入門」以来の、と言いたいところだが、それは少々遠慮して、マンダニの「反"人口抑制の論理」以来の、きわだって面白い本であった。何が面白いのかというと、初めから終りまで、本当のことが書いてあるからである。本当のことが書いてあるから面白い、というのも、情けない話ではあるが、世の中それほど、ウソで固めた本が出回っている、ということか。

著者は全部で14名、すべて静岡市の小・中学校の教員で、またすべて、静岡市教職員組合の生き残りである。生き残りというのは、静岡市教組でもおきまりの組合切りくずしが行なわれて —— これを"正常化運動"というらしい。いずこも同じ、か —— 第2組合がつくられたからである。1600名をようした市教組は、いまや無惨にも二百数十名。だから"生き残り"である。そして、第1組合に残っている限り、いくら才をとっても、教頭や校長にはなれない。だから「生涯ヒラ教員」である。

静岡市の教育委員会と第2組合とから、いじめられ差別されつづけている生き残りの先生たちは、しかし、「野火」という機関紙を出しつづけ、副題にある通り「子供をダメにするものとたたか」いつづけている。その書かれたものは、どれをとっても、明かるく、力強く、自信に満ちた文章で、人間という生きものは、いじめられている方が朗らかになるんかいな、などと思ってしまう。確かに、開き直ると人間大変強くなる。もっとも、権力者が開き直ると始末に困るから、当会会員の中でも少しえらい人 —— 不名誉会員など —— は、まちがってもしてはいけない。開き直りは、下の者の特権である。

内容をいちいち紹介するのは止めて、その一文を、全面引用することにしよう。その方が、この

本の内容を生き生きと伝えてくれると思うからであって、決して労をいとったからではない。無断引用は著作権法にふれることは承知しているが、我が生物学会１８０人会員中、１８人くらいは、この本を買ってくれると信じているので、それでごかんべん願いたい。

「チャイムで止まれ」　　池ヶ谷亘枝

無断引用によりp225～232の一部は非表示とする

ある友人に聞いた話なのだが、書評のこつというのは、七分ほめて三分けなすのだそうである。そういう書評を書いておくと、また依頼がくる。私は、思考が単純なせいか、いつでも、十分ほめるか、十分けなすか、しかしたことがない。それで、どこからも書評の依頼が来ないわけがやっとわかった。依頼がくるのは「日本生物学会」だけで、ここは残念なことに、原稿料をくれないところである。そこで、ここでは、少々難もつけておくことにしよう。

それは、ここに書かれている１４人の著者の方々は、いずれも、全力をあげて子供の教育にうちこまれている、真面目な人たちばかりである、ということである。いや、それがよくない、などといえるわけはなく、またいうつもりもないが、私のようなずぼら者にとっては、はなはだ近より難い思いがした。世の中には、いじめられ、差別され、出世の道を断たれ、それでもなお、何とか自分の信念をつらぬいて生きようとしている（ここまでは著者等と同じ）が、もうすこし不真面目で、もうすこしずぼらで、自分の仕事にそれほど打ちこめない人も存在する。そういう人も、見捨てないで、仲間に

入れてやってほしい、とお願いしたいわけである。

太郎次郎社などという出版社は、あまり聞かないし、この本が金沢の本屋さんに並んでいるのは見たことがない。どうして、本当のことを書いたいい本が、マンダニの本といい、大きな出版社からは出ないのだろう。

本屋さんに注文しやすいように、出版社の住所を書いておこう。

東京都文京区本郷　５－３３－６　　振替：東京５－１３７８４５

書　評（その2）

「原　発　死　――　一人息子を奪われた父親の手記」

松本直治著

潮　出版社　　0030－000225－0516

1979年7月10日　　1200円

原子爆弾はいけないが、原子力発電所は“平和利用”だからいいのではないか、石油がなくなってエネルギーも足りなくなるそうだし。というのが、平均的平和愛好日本人の気持ではなかろうか。

実は私も、ごく最近までそのくらいに思っていた。広島・長崎の印象があまりにも強く（当時、多感？な中学2年生だった）、それ以来、原子力関係には無意識的に拒否反応をおこし、なるべくさわりたくなかったせいもあって、ほとんど勉強してこなかったからである。もっとも、それは言い訳にならない。同年配でありながら、しつこく原爆問題を追及しつづけている、大江健三郎といった、立派な人もいる。

ところが、最近、ひょんなことから、能登・七尾の火力発電所反対闘争に、ごくごくわずかながらかかわりをもってしまい、しまったッ、と思った時はもうおそかった。火電反対は必然的に原発反対につながっていく。なぜといって、火電でもよくないと言ってしまったら、原発はいいとはいえないではないか。

そこでやむをえず、原子力発電関係を本やパンフを読み、講演会など聞きにいっているうちに、次第に、だんだん、その恐しさが身にしみてきた。もともと私は、何か新しいことを始めると、すぐにそのとりことなってしまうくせがある。この夏以来、原付バイク、ゼロハンというそうだが、それの免許をとって、毎日走りまわっている。要するに、中毒しやすい性（たち）らしい。そういえば、胃の手術のときも、まだかかるつもりになっていないのに、あっというまに麻酔され、まったくの無意識のうちに切られてしまった。

それはともかく、原子力発電というものは、恐しいものである。ひょっとするとこれは、今世紀最大の“環境破壊”ではあるまいか。それにしては、あれほど環境、環境とさわいでいる生態学者どもは、いったいこの問題についてどう考えているのだ。一言も発言しないではないか！などと考えているうちに、私自身が生態学者の1人であったことに気がついた、という次第である。

原子力発電なるものが、いかにウソで固められた、危険極まりないものであるか、ということについては、また、当学会誌の誌面を大幅にお借りして、エンエン・コンコンと説かせていただく予定で

いるが、それはおそらく、例によって大変不真面目なものになるであろう。そこで、その前に、この本の紹介をして、ひきしめておくことにする。

著者の松本直治氏は、東京新聞、北国新聞、北日本新聞などの論説委員を長くつとめられたジャーナリストである。その一人息子の勝信氏は、大学を出て北陸電力に入社し、「これからの電力マンが仕事に生きがいを求めるのは、近代科学の先端を行く原子力にある」と、「若者らしい情熱をたぎらせ」、北陸電力から東海村へ、そしてさらに敦賀の日本原子力発電所へ出向して、技術を研修した。いずれ開発される能登原発の技術要員を目指したわけである。

ところが、この若者の情熱を待ちうけていたのは、放射線被曝であり、舌ガンの発病であり、手術であり、転移であり、そして、若い妻と一人息子を残しての「原発死」であった。

会社側はもちろん、そのガンの原因が原発の放射能のせいである、と認めたりはしない。年老いた父、松本さんは、しかし、どうしてもそのせいであるとしか思えず、たった一人で、北陸電力、日本原子力発電を相手に、たたかいを始める。

息子さんの出向先、日本原子力発電会社の本社をたずねたときのようすを、本文から引用してみよう。

無断引用部(p235～237)は非表示

（１０８～１１１ページ）

松本さんの筆は、長年ジャーナリストとして健筆をふるってきた人とは思えないほど、重い。ここには、運動に直接参加している人の陽気な自信も、科学者の解説記事に見られる“客観的冷静さ”も、ない。そこには、自分の一人息子を奪われた、齢老いた一人の親の、深く沈んだ怒りがある。それだけに、その言葉は、客観的事実以上に真実を伝えているのである。

はじめに予告した、私の反原発記事は、例によって不真面目・軽卒なものになるにちがいない。本人がそうでき上っているのだから仕様がない。だからこそ、その前に、この本をじっくり読んでおいてほしいのである。

（奥野良之助）

→→→編 集 者 へ の 手 紙→→→

※　日本生物学会誌をお送り下さいまして、ありがとうございます。この間家へ帰りますと、こんなものがきていると母が貴誌を渡してくれました。もっとも封が切ってあり、母のいわく、「大切なものだと転送しないといけないから」という理由で封を切ったのでした。母はこの学会誌を、一目で重要なものでないと判断した模様です、もっとも、この表紙のオニの絵は、アカデミズムから最も疎遠な印象を万人に与えるに違いありません。食事時に両親の間で、こんな会話がかわされたことでしょう。

母 ―― （目の遠い母は学会誌を遠ざけて）この表紙の絵はなんやろな。

父 ―― オニかな、アマノジャクかな、うーん。

母 ―― 生物の本の表紙にかいてあるんやし、オニて実在するのやな。

父 ―― この間ＮＨＫでゆうてたけど（これは自分の話を権威づけるため）、もともとは世界中に住んでたんやけど、洪積世の第２氷河期から間氷期にかけて、寒さのため次第に南下して、今はアマゾンの奥地と、パプアニューギニアの一部に残存してるのやそうや。

母 ―― それやったら桃太郎の話は実話かいな。

父 ―― ほんまにお前はがくがないのう。あれは作り話やけど、大昔のオニと人間のあらそいがいい伝えられて、後世に残ったもんや。そやけど、ニューギニアに虎がおらんのに、パンツどうしてるのかな。

というようなわけで、このような立派な貴誌を、郷里に送ってもらうと、いろいろな物議をかもしますので、以後次の住所へお送り下さい。……

（会長いわく、「何の話かと思たら、住所変更通知やんけ。手数のかかる奴やなあ。それにしても、苦労して育てた子がこれでは、親がかわいそうや。」編集局員いわく、「会長の子供はもっと悪いて。知らんだけや。」）

<<< 編　集　局　だ　よ　り >>>

ある日、編集局のストーブを囲んで、会長と編集局長とが、何やら言い争っておりました。そこで早速、テープレコーダーのスイッチをパチリ。

一一 会長、こんどは結構たくさん、原稿が集まりましたね。

一一 ああ。

一一 会長の原稿がろくろく出ないというのは、第1号以来のことやないですか。

一一 そやな。

一一 ちっとさびしいんでしょう。

一一 そんなことはない。みんなが書かんから、無理して書いてただけや。書かんですむんなら、こんな楽なことはない。

一一 それにしては、しかし、何となく浮かぬ顔してはりますな。ま、それはともかく、京都の足立先生の原稿は、ちょっと問題ですよ。

一一 そんなこと、ないやろ。

一一 でも、足立先生、勝手に「総会」をつくられてますけど、ほんとにいいんですか。

一一 総会というのは、独裁下の我が学会には存在せんから困るけど、大会やと思たら、別に差し支えない。

一一 そういうても、足立先生が京都からおみこし上げて、金沢へ来て、会長をホテルによび出して、しゃべった、というだけの話でしょう。それでも大会になるんですか。

一一 君、会則ちゃんと読んでるか。

一一 会則ですか。「第2の事業は“大会”である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する」 ……むむ？

一一 ほれみい。ちゃんと大会になっとるやないか。まあ、2人で大会いうのも、ちょっと気はひけるけどな。小会というわけもいかんし。

一一 でも会長、それはムチャですよ。そんなら、会員が2人よってしゃべったら、みんな大会ですか。

一一 金沢でないといかんよ。地方でやったら、地方大会や。

一一 金沢ででも、毎日いっぱい、大会が開かれてることになりますよ。

一一 大会は年1回と決まってるから、今年はもうしまいや。早いもの勝ちやな。

―― それなら、来年1月1日に大会を開いてやる！

―― 勝手に開け。オレは何も困らん。

―― でも、本当の大会を開きたくなったら困るのとちがいますか。

―― そんな気にはめったにならんから、ええ。

―― もし、万一、なったらどうします。

―― そのときは、臨時大会ということにしたらいい。

編集局長はあきれはてて、黙ってしまいました。次の日のことです。再び論戦がはじまりました。

―― 会長、足立先生の原稿のことですけどね。

―― 何や、しつこいな。また大会のことか。タイガイにせえ。

―― 会長はこの原稿読んで、判りましたか。

―― 何が？

―― いや、足立先生が一体何を書かれたのか。

―― そんなもん、判らんでどうする。

―― 何もかも、全部？

―― ああ。

―― ほんとに、すみからすみまで？

―― くどいね。

―― それなら聞きますけどね。

―― 何でも聞け。

―― 「34Pあたり、上にはり出した眼。何か忘れましたが、だいぶ以前に見ました物の本によりますと、これに2種あって松果体（後）と頭頂器（前）にそれぞれ相同のが、松果眼と頭頂眼とよばれてます。両方ともが眼になることはなく、奇眼というのだそうです」とありますが（本文219ページ）、これ、会長、判りますか？

―― 君は、オレの「人と生き物 48講」なるメイ著（口で言ってるので、"名"なのか"迷"なのか、判らなかった ― 編集子）を、まだ読んでないんやろ。

―― ああ、あの本ですか、表紙がオリに囲まれてる奴。まだ読んでません。

―― 何で読まんのや。

―― だって、会長が前に言うてたやないですか、知ってる人の書いた本なんか、アホらしくて読めるか、って。

―― そやったかな。まあ、それはええけど、ここはその本を読んどかんと判らんしかけになってるんや。

―― そんなの、不親切ですよ。会員のほとんど全部は、そんな本、読んでないのに。

―― そやからこそ、足立先生は、わざわざ不親切に書いてはるのや。みんなに本買わそうと思てな。

―― それを知ってながら、そのまま載せてるのだったら、会長もグルですね。これは汚職だ。

―― 会則をよく読んでみい。「受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する」

―― 何か、サギみたいですね。ここで説明する分には、会則違反にならんでしょう。説明して下さい

―― 人間の目というのはな、脳の前から二つめ、間脳というところが左右にふくらんで、できたものなんや。そやから“目は心の窓”という。もちろん、心が脳にあるとしての話で、ド・ラ・メトリの言うごとく、心が胃袋にあったら、そうは言えん。

―― あんまり脱線せんといて下さい。ページ数がもう、ぎりぎりなんですから。

―― そんなら黙って聞け。その間脳が、上へもふくらみ出して、もうちょっとで目になりそうになったが、力およばず、松果体になった。そこで、人間は三つ目になりそこのうて残念や、という話が、その本の３７ページに書いてあるんや。

―― 何だ、そんなつまらんことが書いてあるんですか。やっぱり読まんでよかった。知ってる人のは読むな、というのは、確かに真理ですね。

―― 読むな、と言うたんではない、読む気にならん、と言うたんや。

―― 似たようなものですよ。それで、どうなるんです。

―― 足立先生は、その上へふくらんだ目が、やっぱり二つあったのではないかと言うてはるのや。前のが頭頂眼、後のが松果眼で、頭頂眼は左へ振り、松果眼は右へ振ってる。

―― へえー……？　それなら三つ目の目も偶数ですね。でも、“奇眼”と書いてありますよ。

―― 奇眼の奇を、奇数の奇だと思うからいかん。これは、奇妙キテレツの奇や。ケッタイな目やから奇眼という。

―― あんまり、為になる話でもないですね。

―― 当り前や。足立先生が、タメになる話なんかするもんか。

―― 会長は、タメにする話をしますけどね。もうひとつうかがいます。「いつも左、あいつはしくじった、という時だけまんなかになったのがミキです」（本文２２１ページ）というのは、どういう意味ですか。

―― なに？　ミキがどうしたって。

―― キャンデイーズのミキのことですよ。

―― そんなこと、知るか。大体足立先生は、いい齢して、キャンデイーズなんかにウツツをぬかしているから、こんなわけのわからんことを書くんや。

―― 会長だって、イクエちゃんにウツツをぬかしてるやないですか。

―― それでもまだ、試験問題に出したこと、ないよ。

―― やっぱり会長だって、判らんところがあったやないですか。大体、この文章は不親切や。もっと読む人のこと、考えてもらわんと。

―― 何をもって、親切というか。それはちょっと問題やで。大体君ら、高度成長経済の申し子は、手とり足とり、親切に育てられすぎとるから、いつまでたっても自立できんのや。わからんかったら、著者に文句を言う前に、ちょっとは自分で調べて考えてみい。オレなんか、ヘーゲルの「小論理学」を、だれの助けもかりずに、読破したんやぞ。

―― それで会長、判ったんですか。

―― いや、最初の一字から、最後の一字まで、全然判らなんだ。あれは難しいね。

そして、また、ある日のこと……。

―― 会長、東京支部が発足しましたね。

―― そうやな。結構なことや。

―― しかし、支部会員はおおかた、本部の会員にはなってないですね。それでいいんですか。

―― そんなもん、ちっともかまわん。会則に、「支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない」と書いてある。

―― 東京にもう一人、支部長を自称して支部をつくる会員が出てきたら、どうするんですか。困るんじゃないですか。

―― 一向に困らん。第2東京支部とか、東京支部パート2とでもしたらいいんや。数字は無限にあるから、支部も無限にできる。もっとも、第1億8576万5498東京支部なんてことになったら、少々ややこしくなるが、それでも、東京の人口はたった1000万やから、そうはなるまい。

もし、金沢の人で、東京支部の方が面白そうやというて、そっちへはいりたいとなったら、どうするんですか。金沢在住の東京支部会員なんて、変ですよ。

―― 君も心配性やなあ。それは確かに、矛盾してるが、かまわんやないか。矛盾なくして発展なし、なんてこと、だれか言うてなかったかな。いずれにせよ、それは東京支部長の決めることや。当局は一切関知しない。

日本生物学会ってのは、よっぽどヒマでなければ、つき合えそうにないですね。（編 集 子）

広　　告　　欄

※　七尾火電反対闘争支援カンパのお礼

本誌「第５号」でお願いした支援要請（心ある方は激励を、心なき方はお金を）に、「心ある方はおられなかったようですが、「心なき方」が５人おられて、計５０００円のカンパがよせられました。まあ、"大学会"としては、少々少ない感、なきにしもあらずですが、「現地闘争本部」へとどけたところ、大変喜んでいただいて、次のようなお礼のお手紙が来ました。その中にもあるとおり、情勢我に有利、とはいっても、裁判にはずいぶんお金がかかります。今後も、「心なき方の支援をお待ちしております。　　（奥野良之助）

拝啓

この度は貴重な闘争資金をお贈り下さいまして誠に有難く厚くお礼申します。

電力資本、行政の住民無視と公害から住民を守るため起ち上ってからすでに６年半、

その間金力と権力による権謀術策をはねのけて闘い続けてきた結果は、守友七尾市長の七尾港の大型化を意図した赤崎立地提案となり、がん迷な杉山副知事をして、１０月、火電立地より地元融和が先決と言はしめるまでに追い込んできました。

これも一重に、県下一円にわたる民主勢力による絶大な支援があった賜物と深く感謝しております。

いま闘っている４つの法廷闘争（漁業権確認請求訴訟、埋立工事差止め仮処分申請、埋立免許取消請求訴訟、４・２刑事被告事件）も、今後の動きに微妙に影響しているよう感ぜられますが、５５年４月の工事着工期限切れが事態をどう展開させていくのか、大きな山場になってくるものと判断しております。

北電をして立地断念を声命させるまで闘い抜く決意で、同志一同がんばっております。

今後も変らざるご支援をお願い申し上げ、お礼のごあいさつ申し上げます。

１９７９・１１・１３

七尾火電埋立阻止　現地闘争本部

※　東京支部　結成！！

第５号に出た、東海支部結成にひきつづき、このほど、東京支部結成の報告がきました。おまけ

生意気にも、「い き も の」なる支部会誌まで発行しております。その表紙と支部会則その他を収録しておきますので、支部へ入会したい人はそちらの方へ。

いきもの

オ1号

日本生物学会東京支部学会誌

もくじ

日本生物学会東京支部の発足にあたって---------- 1

虎とパンダの死に関する考察---------- 4

あさがお---------- 15

草花に寄せる想い---------- 15

設立記念学会及びオ2回臨時学会報告---------- 16

飽食のエクスタシー---------- 21
—食うことについての生物学的—
研究論序説

日本生物学会東京支部とその会員とそしてその
周辺に関する話題ブレコレ---------- 24

日本生物学会東京支部の発足にあたって

日本生物学会東京支部　支部長　栗間修平
その他小勢

日本生物学会東京支部の発足へ向けて、次のような「よびかけ文」を配布したところ、十余名の会員が集まり、めでたく日本生物学会東京支部は発足した。今、学会誌の発行という偉業の実現にあたり、「よびかけ文」を一部手直ししてここに再録し、「東京支部」のより一層の発展を期するものである。

約2年前、極めて「垢でみっく」な学会が誕生した。

「日本生物学会」設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その1つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集り次第発行する。したがって、原稿が集らなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、"生物"には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、"日本"生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修整のうえ、無責任に掲載する。

第2の事業は、「大会」である。年1回金沢において開く。大会は、喋りたいものが喋り、聞きたい者が聞くことによって成立する。したがって、喋りたい者がいなければ直ちに解散する。二次会はさまたげない。

会員の資格は"非教授"とする。要するに、教授以外であれば誰でもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費を納めること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定収についているもの年1000円、定収なきもの年100円とする。善意の寄付は、これをこばまない。ただし、寄付しても、何の特典も与えない。

会の"管理・運営"は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権をもつ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1金沢大学理学部生物学教室生態学II研究室におく。連絡はすべて本部あておこなうこと。

各地に支部を設立することが望しい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の"管理・運営"は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は(あまりいるとは思えないが)、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部までおくられたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほど。

1977年5月26日の佳き日に　会長　奥野良之助

設立以来2年有余、会は着々と成長し「学会誌」を6号まで出すに至っている。そこで目的はないけれど「日本生物学会東京支部」を発足させたいと思っている。「設立趣意書」は本部のものを準用する。細かい点はおって定める。が、次のことは決めておきたい。

(1)目的はないので、特別なことは特にしない。ただ本部にならって「学会誌」を発行する。それは原稿の集り具合による不定期刊とする。また、本部の「大会」とは別に「学会」を開催する。「学会」は適宜"現場"で行なう。"現場"とは、生物のいる全ての場をいう。

(2)会員は登録制とする。会費は必要に応じて適宜徴収し、会員は能力に応じてそれにこたえる。なお失業者及びそれに準ずる者は「徳政」をもって会費を免除する。会員はあまりコムツカシイことを言わないことを原則とする。また本部の会員になる、ならぬは自由である。

(3)支部事務局は、当分の間、支部長の体と共に移動する。支部長がパチン

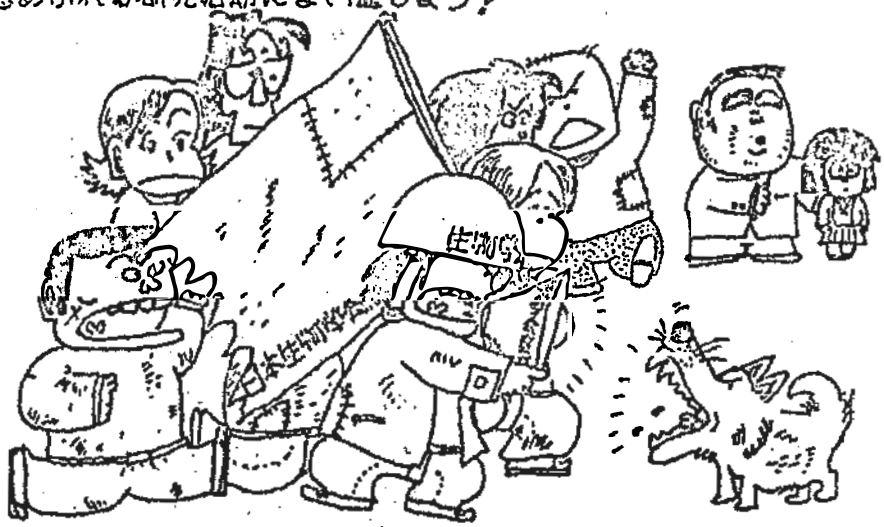
コ屋にいる時は、パチンコ屋に事務局は設置される。

「死にもの」ではなく「生きもの」に関心ある方、「生命のリズム」を大切にしたい方、そんな人は全て、日本生物学会東京支部に参加して欲しい。ただし、そもそも「学問」というものは「役に立たない」ものであるから、学会に加わっても何の「役に立たない」ことはご承知おきのこと。会員になろうとする人は、メモ用紙に氏名と連絡先を書いて、支部長に手渡されたい。

かくして、日本生物学会東京支部は発足した。今後も「学会誌」の発行、「学会」及び「学術会議」の開催を含め、旺盛かつバラエティに富んだ研究活動を、その気になった時、やっていきたい。

なお、日本生物学会東京支部の会員は、現在のところ一都三県に居住しており、東京支部は事実上「関東地支部」であることを、ここに宣言しておく。また「東京支部」という名称は、短い間なじんできた名であるので、通称として存続させる。地域ごとに「分会」を、テーマごとに「部会」を組織することが望ましい。が、「東京支部」を分解させるような「分会」には断乎たる処置をもって臨む。

創意あふれる研究活動にまい進しよう！



-3-

バックナンバー増刷のお知らせ

第1号と第3号のバックナンバーが品切れになっていて、大変ご迷惑をおかけしていましたが、このほど増刷しましたので、最近新しく会員になられた方は申しこんで下さい。おり返し、といっても、ずいぶんひまのかかることもありますが、お送りしますので、気長にお待ち下さい。

現在、バックナンバーは全号そろっております。そのほかにもほしい方は、送料（1冊１４０円、２－４冊２００円、５冊以上３００円）を負担の上、お申しこみ下さい。

日本生物学会誌　第７号　１９７９年１２月２０日
編集・発行　日本生物学会
金沢市丸の内１の１
金沢大学理学部生物学教室
生態学第１研究室内
編集無責任者　奥野良之助